

私が描く札幌物語

「私が描く札幌物語」実行委員会 石川 隆
(札幌市北区職員)

1

はじめに

「私が描く札幌物語」は、西暦2000年のミレニアム・イヤーを記念して、札幌の未来像を思い描いてもらうことを目的に開催したのが始まりです。第1回目の募集タイトルは「新春初夢を語る会」と題して、札幌市職員のみを対象に作品を募集し、発表会は札幌市役所12階の大会議室で開催しました。第2回目は「札幌物語を描く」と題して、職員に限らず広く札幌市民にも応募を呼び掛け、会場も札幌市役所から札幌市民の心のふるさとである札幌市時計台（国指定重要文化財）に移して開催しました。以後、会場は毎年「札幌市時計台」としています。



2008年のシンポジウムの様子（左が筆者）

第3回目からはメインテーマを「私が描く札幌物語」と固定するとともに、開催する回毎にサブテーマを設定し、内容もシンポジウム形式としました。また、その都度サブテーマに相応しいパネ

リストを4～5人程度お招きして、その方々の生き方やポリシー、モットーなどのお話を伺っています。このような形式で、ほぼ毎年継続しており、2008年（平成20年）9月18日の開催で、通算7回目となりました。いずれの回も魅力的なパネリストを迎えて、札幌市に思いを寄せる市民の熱意を感じることができ、貴重な政策研究の場となっています。

それでは、「私が描く札幌物語」の草創期である第1回目と第2回目の取り組みの内容を述べるとともに、第3回目以降については開催の軌跡について紹介します。

2 草創期の内容と開催の軌跡

第1回目

開催日：2000年（平成12年）2月1日（火）

開催場所：札幌市役所12階 大会議室

テーマ：新春初夢を語る会

(1) 募集テーマ

札幌の2000年夢とロマン 私のミレニアム計画
例えば、「21世紀の札幌をどんなまちに?」「札幌がもっと魅力的で楽しいまちにするには?」「新しいミレニアムの年に当たり、あなたが描いている夢は?」など、自分がプロデューサーになり、思い切り描く札幌の50年後、100年後の夢を募集します。プラン・エッセイ・ポエム・イラストなど形式は自由です。

(2) 応募資格

札幌市職員

(3) 作品の選考

選考委員会（収入役、総務局理事、都市政策研究室長、その他）を設置し、ビックな初夢を語った人を選び、賞を贈ります。

以上のような案内文を作成し、メール便や庁内回覧便により周知しました。

(4) 選考結果

選考委員会からの推薦と会場からの投票数も加味した結果、応募総数 20 作品の中から八田智宏さんの「札幌から世界の子どもたちに夢を送りたい」との願いが込められた「ゆきまる伝説」が初夢大賞の栄冠に輝きました。また、準大賞には斗内邦裕さんの「A day in sapporo metropolitan area 2XXX」が受賞し、初夢賞には「札幌オープンスペース物語」の高橋悟さん、「サイクル都市札幌」の鈴木亨さん、そして「21 世紀の札幌は世界随一のキッズシティになる」の河野憲義さんの 3 名が受賞しました。



札幌市役所 12 階での発表風景

第 2 回目

開催日：2001 年（平成 13 年）9 月 19 日（水）

開催場所：札幌市時計台 2 階講堂

テーマ：札幌物語を描く

(1) 募集テーマ

あなたの札幌物語を描く

“新春初夢を語る会”に引き続き、あなたの札幌物語を描いてください。

まちづくりは、過去から現在、そして未来へ訪れていく物語です。私たちは、いつも小さな仕事を小さく分担していますが、時には大きな仕事を描いてみませんか？心の奥底にしまっていた、これまで語ることのなかったあなたの思いをこの機会に語ってください。

(2) 応募資格

札幌市に思いを寄せる人

(3) 作品の選考

選考委員会（収入役、総務局理事、都市政策研究室長、その他）を設置し、優秀作品には賞を贈ります。

以上のような案内文を作成し、この回から応募資格者の対象を一般市民も含む「札幌市に思いを寄せる人」に広げました。市職員には庁内回覧便で周知し、市民の皆さまにはマスコミ（北海道新聞）への掲載を通してお知らせしました。

(4) 選考結果

市民にも応募を呼び掛けたことから、物語がどのくらい集まるか期待と不安がありましたが、ふたを開けてみると総勢 17 人、俳句や短歌を含め 25 作品の応募がありました（うち、市民 11 名、19 作品）。

作品の選考は、前回と同様に収入役を選考委員長とし、選考委員会からの推薦と会場からの投票数も加味して行いました。その結果、大賞には河野憲義さんの「一冊の絵本が札幌を変えた」が選ばれ、準大賞には金田博恵さんの「こどもの笑顔があふれる街に」が選ばれました。

第 3 回目以降

第 3 回目からは「私が描く札幌物語」としてメインテーマを固定し、その回毎にサブテーマを設定して、それに相応しいパネリストをお招きしてのシンポジウム形式で実施することにしました。

シンポジウムの軌跡 (3回目から)

回	開催日・サブテーマの内容 (パネリスト人数)
3	開催日: 2003年(平成15年)3月12日(水) テーマ: 夢実現への第一歩 (5人)
4	開催日: 2004年(平成16年)3月24日(水) テーマ: 札幌らしいスポーツの楽しみ方 (4人)
5	開催日: 2006年(平成18年)4月19日(水) テーマ: 将来の札幌を担う子どもたちのために (4人)
6	開催日: 2007年(平成19年)7月4日(水) テーマ: 外からみたSAPPORO (4人)
7	開催日: 2008年(平成20年)9月18日(木) テーマ: 学生が地域活動が続けていくために (5人)

3 会場を時計台にこだわる理由

札幌市時計台は、有島武郎の名作「星座」や、森田たまの随筆「時計台」の中で、両作家の時計台に寄せる熱き思いが記されていますが、今に生きる私たち札幌市民にもその時計台の鐘の音は心に響くものがあります。

時計台で学んだ、先輩には内村鑑三、新渡戸稲造、宮部金吾、廣井勇、佐藤昌介、志賀重昂しげたかなど近代日本を代表する思想家、研究者、技術者、教育者等多くの偉人・賢人がいます。



札幌市時計台 2階

我々の実践している札幌物語の会場を時計台にこだわっているのも、この辺のルーツと多いに関係するところでもあります。

4 パネリストの選定 (依頼について)

第3回目から、発表をシンポジウム形式に変更しましたが、この形式をとってから22人のパネリストをお招きし、お話を伺いました。さすが190万都市の札幌、人材は豊富で人選に困ったことはありません。

困ると言えば、やはり金銭的なこと。第1回目と第2回目は札幌市からの支援がありましたが、第3回目以降はバツサリ。以後は、自己資金と篤志家の寄付を頼りに開催しており、今後の解決すべき課題であります。



講演後、パネリストとの楽しい語らいのひとつ

5 おわりに

札幌物語も数えること第7回目となりました。「継続は力なり」の諺を心の糧ことわざとし、曲がりなりにも継続しています。物事は一人では何もできません。同僚委員、パネリスト、パネリストの応援団(パネリストの人柄などを紹介してもらっている)聴きに来てくれる方、寄付をしてくれる方々がいればこそであり、皆さんに感謝であります。企画から運営まで全くの素人集団の手弁当で開催している「私が描く札幌物語」は、今後とも地道に焦らず、楽しみながら身の丈で皆さんの協力を得ながら継続していく決意であります。